

〔夏季例会報告〕

諏訪湖の植物観察会

井上 健

第143回例会は、平成5年7月10日～11日の2日間、神戸大学の角野康郎氏を講師にお願いし、水草をテーマに諏訪湖周辺で行われた。例会には長野県植物研究会員の他、諏訪教育会および井上ゼミの学生も参加した。

参加者は講師の角野康郎先生、今井建樹、落合照雄、小口好久、宮島吉彦、諏訪教育会5名、井上ゼミ学生4名、それに幹事の井上健の計15名でした。

第1日目7月10日は午後6時に信州大学の諏訪臨湖実験所に現地集合し、実験所で夕食を取った後、角野先生による諏訪教育会の持参した水草標本の同定会および、角野先生から日本の水草についてのスライド講演が行われた。

第2日目7月11日はボートを2隻借り、諏訪湖の水草の観察を行った。観察された水草はコウホネ・ヒシ・ミクリ・エビモ・ヒロハノエビモ・アサザ・コカナダモ・ウキクサ・コウキクサ・エゾヤナギモ・ホソバミズヒキモなどであった。諏訪湖における水草の観察は午前中で終了し、昼前に散会した。角野先生と私など7名は午後白駒の池に向かいホソバウキミクリなどを観察して帰路についた。

「新刊紹介」 井上健・湯本貴和編「昆虫を誘い寄せる戦略—植物の繁殖と共生」(シリーズ地球共生系3), 258 p, 平凡社。3200 円。1992 年。

本研究会幹事の井上先生が編集、執筆に参与している書である。このシリーズは川那辺浩哉監修の全6巻からなっている。すなわち「地球共生系：多様な生物の共存を促進する相互作用機構」をテーマとする共同研究が、生態学、進化生物学、細胞・分子生物学などの専門分野の研究者によって行われたが、その成果や個人の研究をまとめて刊行されたものである。ところで、本書は全巻の中で3番目を占めるが、この第3巻を理解する上で、できるなら全巻を通して読んでみたい。ところで、第3巻は、生物の共生を一般にとらえられているように、「衣食住」すなわち生活の面からとらえるのではなく、子孫存続のため「繁殖」の面からみてみようというものである。編者もいうように、両者は生物の生存のために相互補完的であるが、地球上でこれほどまでに種多様性や種分化が行われてきていること、また進化の問題を考える上では、繁殖とそれに関わる種間関係を解き明かさねばならない。その具体的対象として、植物の繁殖に関わる動物（とくに昆虫類）との共生関係、すなわち送粉生物学が重要な研究分野となってきた。本書は9章からなり、送粉システムの進化、ツリフネソウ科の送粉様式、ヤマハッカ属と訪花昆虫、送粉者の介在した種分化、以下、植物の花に関する繁殖生物学、花粉形態学、生態学等の内容から構成されている。本書に納められた内容は、現代の植物系統進化学の最先端を行くものであり、もっとも研究が進展し、かつ成果が上がっている分野である。その成果をいま、分かりやすくこのような形にまとめて出版されたことの意義は大きく、わが国のこの分野のもっとも新しいテキストとして価値あるものと思われる。

(K. T.)